

こしえるびと

つむぐストーリー vol.137

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

門崎地区の農地を守るために

初夏の日差しが降り注ぐ門崎地区の水田。水の中をのぞくと、元気に泳ぐミナミメダカの姿が見える。

門崎ファームの歴史は20年ほど前にさかのぼる。2004年に門崎地区で基盤整備事業が始まり、07年に前身となる門崎地区農地管理組合が設立された。地域と協力しながら基盤整備は進んでいくも、小さい規模の農家からは、基盤整備による圃場の大区画化に対して不安の声も多かった。その声に応えるように、法人化による集落営農の実現を目指して13年に門崎ファームを設立。地域の農業を大きい組織の力で本格的に担っていくことになった。

自然環境に優しい農業

門崎ファームでは、地域に生息する生物を保護しながら営農する「環境保

全型農業」に取り組んでいる。きっかけは基盤整備事業が始まる前の01年ごろ、岩手大学の研究により地区内に絶滅危惧種であるメダカの生息が確認されたこと。「事業が始まるとメダカが減ってしまう」という懸念が強まり、メダカと共存できる整備と仕組み作りを進めることになった。その内容は、メダカが生息する環境に限りなく近い水路を水田に併設するというもの。コンクリートではなく土の水路で、水田への入水や落水による水の動きとともにメダカを移動させる「往来工」や、繁殖のためのビオトープなどを整備し、圃場の水管理をしても、メダカがストレスなくすめる仕組みを完成させた。

これにより、農業農村整備優良地区コンクールでは、17年に最高位の農林水産大臣賞に輝き、各地から注目を集めるようになった。

未来へつないでいくために

門崎ファームでは農業体験の提供も行っている。代表理事組合長を務める藤江修さんは「真剣に向き合ってもらうために自分たちもとことん準備をして臨む」と、小学校の田植えや稲刈り体験ではマニュアルとして紙芝居を用意して説明する。農業に興味を持ってもらうために何ができるかを考え、熱を込めてその魅力を伝えている。

今後の目標は、自然環境を守る農業にこだわりの続けること。環境保全しながらの営農は、圃場の維持管理などで大変な面も多いが、「それでもこの自然を守るんだ」と藤江さんは決意する。一方で今年からドローンを導入するなど、効率化を図りながら試行錯誤を重ねている。メダカが川の上流へ向かうように、門崎ファームも志高く道を突き進んでいく。

豊かな自然を未来へつなぐ

川崎町門崎 農事組合法人

門崎ファーム



農事組合法人 門崎ファーム

PROFILE

川崎町門崎地区を対象とした県営経営体育成基盤整備事業に伴い、2013年4月に設立。「～ Sustainable Farming ～食と共に環境を守る」を経営理念に掲げ、メダカやホタルが生息する環境を守る環境保全型農業に取り組み、ブランド米「門崎めだか米 (特別栽培米)」 「門崎ホタル米」を手掛ける。組合員数189人、水稻49㍎。